

学習性無力感に関する研究
その10, 先行解決不可能課題と後続解決可能課題
の類似性が後続解決可能課題の遂行に及ぼす効果

青 柳 肇* 細 田 一 秋**

The Effect of the Similarity between the First Unsolvable Tasks and the Second Solvable or Unsolvable Ones upon the Performance of Test Tasks.

Hajime Aoyagi* and Kazuaki Hosoda**

Abstract

The purpose of this study was to examine the effect of inserting solvable or unsolvable tasks between pretreatment tasks and test tasks, on the performance of test tasks, attribution and contingencies of reinforcement. The inserted tasks were different degree of similarity (i.e. math problems or anagrams) with test tasks.

The experiment was conducted over 3 sessions. The first 2 sessions served as the pretreatment. 190 undergraduates were given 10 math tasks (involving 5 unsolvable tasks) as the first pretreatment. In the second pretreatment session, they were divided into 4 groups and were administered 4 different tasks. The first group, LI, was given 5 unsolvable and 5 solvable anagram tasks. The second group, LS, was given 10 solvable anagram tasks. The third group, MI, was given 5 unsolvable and 5 solvable math tasks. And the fourth group, MS, was given 10 solvable math tasks. In the test sessions, all groups were given 10 solvable math tasks. The Attributional Style Questionnaire (ASQ) was administered to all groups between the 1st session and the 2nd session and the 3rd session. The subjective cognition of contingency of reinforcement was asked of all groups after all sessions were finished.

The main results were as follows:

- (1) The LS group was superior to the other groups on the test tasks.
- (2) Both groups given insolvable tasks (LI and MI) showed less internality after failing tasks. Such movement in attribution was thought to be an adjustive response to failure on the tasks.
- (3) Similarly the insolvable groups showed less feeling of control. It was suggested that the insertion of different solvable tasks with pretreatment tasks resulted in the disappearance of Learned Helplessness.

* 人間基礎科学科

* *Department of Basic Human Sciences*

** 工学院大学 (非常勤)

** *Kogakuin University*

目 的

学習性無力感の解消には、帰属を変化させることが重要であると考えられている。帰属の変化についての研究でも Seligman ら (Abramson, Seligman, and Teasdale, 1978; Abramson, Alloy and Metalsky, 1988) の考え方は、負の事態での内的、安定的、全体的、および正の事態での外的、不安定的、特殊的、帰属スタイルは、各々無力感を生むと考える。したがって、正事態で、内的、安定的、全体的、および負の事態での外的、不安定的、特殊的、帰属スタイルが、無力感を予防したり、解消するのに有効であると考えてよい。

Dweck (1981) は、帰属理論に加えて、能力観や目標設定の仕方が失敗事態での無力感を形成したり解消 (効力感の獲得) するのに有効であると考えている。すなわち、能力は向上するという能力観を持った者は、学習目標を設定し、失敗事態でも無力感を形成しないというものである。

一方、ストレス学からの 1 研究 Goodhart (1986) のものがある。この研究では、感情を喚起させることにより課題遂行に影響を与えることを示した。すなわち、達成場面で、遂行を予測した場合、不快感情 (過去の不快体験の想起) を喚起させると遂行が向上するというものである。この研究に基づき筆者らはアナグラム課題を用いて検討した。その結果、男子では Goodhart と同様な結果を示した (青柳肇, 高島直子, 1988)。それとは別の筆者らの先行研究では、感情を物理的的刺激を与えて喚起させ、課題遂行を検討した。すなわち、先行解決不可能課題と後続解決可能課題の間に快刺激 (音楽) と不快刺激 (ホワイトノイズ) を挿入すると、後続解決可能課題の遂行は、不快刺激を与えられた時の方が有意ではなかったが数値上高かった (青柳肇, 細田一秋 1992)。このことについて筆者らは、先行解決不可能課題での失敗による不快感を挿入した別の不快刺激が軽減したためであろうと考えた。しかし、Seligman の初期の研究では、解決不可能な課題を行うことによる不快感情の喚起と異なる事態での不快感情の喚起は、他の場面への般化を生み遂行を下げると考えられるし、帰属理論の立場からも不快刺激が同種

のものより、異種のものでは普遍性と関係するため遂行を下げる事が予想される (Seligman, 1975)。本研究では、この問題について検討する。なお、筆者らの 2 つの研究では、課題遂行と全く無関係な不快刺激を与えることで検討された。本研究では、前処置課題と課題遂行という点では類似しているがその中での課題の類似度の程度が後のテスト課題にどのような効果を持つかを検討することを目的とした。その際、単にテスト課題での遂行ばかりでなく、帰属様式の変化や随伴性の認識の面からも検討を加える。

方 法

1. 被験者

埼玉県下私立大学生男女計 190 名

2. 課題

① 数的処理課題：4 つの数字を入れ換えることなく演算子 (+ - × ÷) を入れて右辺に書かれた答となるようにする課題。

② 言語的処理課題：5 文字のカタカナによるアナグラム。

3. 手続き

実験は以下のような順で行われた。

① 前処置 1：被験者全員に数的処理課題 10 問を与えた。10 問のうち 5 問は解決不可能課題であった (付表 1 参照)。制限時間は 10 分であった。

② 前処置 2：被験者をランダムに下記の 4 群に分け、各々異なる課題を与えた。どの群も制限時間は 10 分であった。
L I 群・・・言語処理課題 (アナグラム) 10 問、うち 5 問は解決不能 (付表 2 参照)。
L S 群・・・解決可能な言語処理課題 (アナグラム) 10 問 (付表 3 参照)。

M I 群・・・数的処理課題 10 問、そのうち 5 問は解決不可能 (付表 4 参照)。

M S 群・・・解決可能な数的処理課題 10 問 (付表 5 参照)。

③ A S Q (Attributional Style Questionnaire)

質問紙を実施：Peterson et al. (1979)の形式を本実験用に修正したもの(図1参照)。これにより、統制の位置、安定性、普遍性、統制可能性が測定された。

④テスト(後続)課題：全群とも解決可能な数的処理課題10問(付表6)。制限時

間は10分であった。

⑤ASQ質問紙の実施：③で行ったものと同一のものを行った。

⑥随伴性の主観的判断：最後に2つの前処置課題およびテスト課題でどの程度正答できたかについて百分率で示させた。

問 題	解 答 欄
1) 2 5 5 2 = 4	2 5 5 2 = 4
2) 3 4 8 5 = 15	3 4 8 5 = 15
3) 9 4 8 3 = 18	9 4 8 3 = 18
4) 1 9 2 3 = 27	1 9 2 3 = 27
5) 6 5 8 2 = 7	6 5 8 2 = 7
6) 9 5 3 6 = 18	9 5 3 6 = 18
7) 7 1 8 5 = 54	7 1 8 5 = 54
8) 3 9 9 8 = 8	3 9 9 8 = 8
9) 1 9 8 4 = 15	1 9 8 4 = 15
10) 7 3 7 6 = 23	7 3 7 6 = 23

付表1 数的処理課題(前処置1)

問 題	解 答 欄
1) マツウセオ	
2) トウリモス	
3) マリナツヒ	
4) ミミキチナ	
5) カジタラク	
6) デケイウド	
7) チバキエウ	
8) ゴタマデユ	
9) カシナボレ	
10) ムロプラグ	

付表3 LS群 アナグラム課題

問 題	解 答 欄
1) ネコガシム	
2) トンレプゼ	
3) キエガラヤ	
4) ラモノカタ	
5) ヤルオクケ	
6) マハルサア	
7) アタサイク	
8) スリイベタ	
9) ノチトニド	
10) イガカエン	

付表2 LI群 アナグラム課題

問 題	解 答 欄
1) 4 5 2 3 = 10	4 5 2 3 = 10
2) 7 5 2 6 = 3	7 5 2 6 = 3
3) 4 9 3 2 = 28	4 9 3 2 = 28
4) 6 2 2 5 = 42	6 2 2 5 = 42
5) 3 4 6 8 = 14	3 4 6 8 = 14
6) 9 2 2 3 = 39	9 2 2 3 = 39
7) 6 8 6 5 = 8	6 8 6 5 = 8
8) 5 7 4 2 = 38	5 7 4 2 = 38
9) 8 3 7 9 = 28	8 3 7 9 = 28
10) 5 3 4 9 = 13	5 3 4 9 = 13

付表4 MI群 数的処理課題

問 題	解 答 欄
1) 8 3 9 7 =28	8 3 9 7 =28
2) 7 4 6 9 =13	7 4 6 9 =13
3) 4 8 1 9 = 2	4 8 1 9 = 2
4) 5 8 2 3 =12	5 8 2 3 =12
5) 7 2 3 4 =17	7 2 3 4 =17
6) 4 4 4 2 = 3	4 4 4 2 = 3
7) 4 2 3 5 = 2	4 2 3 5 = 2
8) 6 8 3 4 =12	6 8 3 4 =12
9) 9 3 1 3 = 1	9 3 1 3 = 1
10) 3 4 7 9 =14	3 4 7 9 =14

付表5 MS群 数的処理課題

問 題	解 答 欄
1) 9 5 7 2 =26	9 5 7 2 =26
2) 6 8 2 3 =27	6 8 2 3 =27
3) 7 4 9 4 = 3	7 4 9 4 = 3
4) 3 2 7 8 =96	3 2 7 8 =96
5) 4 9 1 3 =11	4 9 1 3 =11
6) 5 2 3 3 = 4	5 2 3 3 = 4
7) 9 5 1 2 =44	9 5 1 2 =44
8) 3 7 9 8 =20	3 7 9 8 =20
9) 8 6 7 3 = 5	8 6 7 3 = 5
10) 2 4 5 9 =20	2 4 5 9 =20

付表6 テスト課題

今、行なった課題について伺います。

質 問

先ほどの課題が（よくできた・よくできなかった）原因についてうかがいます。
（カッコ内のどちらかに○をしてください。）

1. 最大の原因はなんですか。（ ）
（1つだけ記入してください）

2. 上記の原因は、何か自分の内部に起因することがらですか、それともほかの人や周囲の事情に起因することがらですか。（該当する数字を○でかこむ。）

すべて他人あるいは 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6 - 7 すべて自分の内部
周囲の事情に起因する 周囲の事情に起因する

3. 将来またこのような課題を解くときに、この原因が再び関係してくると思いますか。

全く関係しない 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6 - 7 必ず関係する
だろう だろう

4. この原因はこのような課題の場合にだけ関係するものですか、それともあなたの生活の他の場面にも関係するようなものですか。

この課題の場合 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6 - 7 生活の他の場面
にだけ関係する にも関係する。

5. この原因はあなたにとってコントロール可能なものかどうか。

コントロール 1 - 2 - 3 - 4 - 5 - 6 - 7 コントロール
可能である 不可能である

図1 帰属スタイル質問紙 (ASQ)

結果と考察

前処置1における課題遂行の平均と標準偏差を示したのが表1である。分散分析の結果、4群間に有意な差はみられなかった ($F(3,186)=2.031$)。したがって、この4群の課題遂行能力は、等質と考えてよい。

表1 前処置1における課題遂行
(被験者数, 平均, 標準偏差)

	N	M	SD
LI群	55	2.709	1.384
LS群	48	3.125	1.252
MI群	36	3.306	1.287
MS群	51	3.216	1.226
計	190	3.063	1.312

表2は、前処置2における課題遂行の平均と標準偏差を示したものである。ここでは課題と処置の方法が異なるので、4群間の比較は意味がない。そこで、同種課題同士(LI群とLS群, MI群とMS群)および不可能群同士(LI群, MI群)と可能群同士(LS群とMS群)でt検定を行った。

表2 前処置2における課題遂行

	N	M	SD
LI群	55	4.364	1.016
LS群	48	9.104	1.194
MI群	36	3.917	1.223
MS群	51	7.137	2.293
計	190	6.221	2.586

同種課題同士の比較では、言語処理群間($t=21.128, df=101, p<0.001$)、数的処理群間($t=8.373, df=85, p<0.001$)ともに有意差が認められ、両者とも可能課題群(LS群とMS群)が高得点である。また、不可能群同士(LI群, MI群)でt検定を行ったところ、言語処理群(LI群)

の方が有意に高い傾向($t=1.87, df=89, p<0.10$)がみられた。また、可能群間(LS群, MS群)では、言語群(LS群)の方が有意に高かった($t=5.34, df=97, p<0.01$)。このことは、言語処理課題の方が数的処理課題より容易であったともいえるが、前処置1で数的処理(不可能)課題を行ったため前処置2の言語処理課題より同種の数的処理課題での遂行をより低下させたともいえ、本実験の結果だけからはそのいずれであるかを特定できない。

表3は、テスト課題遂行の平均と標準偏差を示したものである。テスト課題を4群間で分散分析したところ、有意な差がみられた($F(3,183)=3.426, p<0.05$)。そこで、群間の比較を行った。その結果、LI群とMS群に有意な差がみられ後者が高得点であった($t=2.750, df=101, p<0.05$)。またLI群とLS群の間にも有意差がみられ、後者の方が高得点であった($t=2.596, df=98, p<0.05$)。それ以外に有意ないし有意な傾向はみられなかった。

表3 テスト課題遂行

	N	M	SD
LI群	55	6.019	2.469
LS群	48	7.250	2.203
MI群	36	6.472	2.703
MS群	51	7.314	2.128
計	187	6.775	2.428

表4は、LI群における前処置1後と前処置2後のASQの下位尺度(I, S, G, C)の平均と標準偏差、ならびにt検定(相関のある)の結果を示したものである。I尺度(統制の位置次元で高得点ほど内的)の得点は有意に低くなっている。C尺度(コントロール感次元で、高得点ほど低コントロール感)では、有意に高得点になっていく。すなわちLI群では、内的統制が弱くなり、コントロール感が失われていくといえる。

表5は、同じくLS群におけるそれを示したものである。両処置後の得点間に有意な差のあるのはみられなかった。

表4 LI群の前処置1後および前処置2後におけるASQ得点 (N=55)

		前処置1後	前処置2後	t 値
I	M	5.709	5.127	2.268*
	SD	1.569	1.982	
S	M	5.345	5.273	0.341
	SD	1.771	1.543	
G	M	4.364	4.327	0.192
	SD	1.852	1.888	
C	M	4.000	4.473	2.162*
	SD	1.915	1.616	

* $p < 0.05$.

表5 LS群の前処置1後および前処置2後におけるASQ得点 (N=48)

		前処置1後	前処置2後	t 値
I	M	5.896	5.833	0.231
	SD	1.212	1.736	
S	M	5.667	5.521	0.541
	SD	1.389	1.568	
G	M	4.833	4.896	0.239
	SD	1.807	1.828	
C	M	3.625	3.833	0.586
	SD	1.855	2.254	

表6は、同じくMI群におけるそれを示したものである。有意な差のみられたのはなかったが、C尺度で高得点になっていく傾向がみられた。

表6 MI群の前処置1後および前処置2後におけるASQ得点 (N=36)

		前処置1後	前処置2後	t 値
I	M	5.667	5.472	0.756
	SD	1.780	1.992	
S	M	5.417	4.972	1.639
	SD	1.816	1.993	
G	M	4.111	3.889	0.903
	SD	1.868	2.038	
C	M	3.250	3.750	2.023†
	SD	1.656	1.876	

† $p < 0.10$.

表7は、同じくMS群におけるそれを示したものである。両処置後の得点間に有意な差のあるものはみられなかった。

これらの結果は、不可能課題を与えられるとコントロール感を減少させるといえる。その効果は、異種課題である言語課題の方が大きい。このことは、数的処理課題ばかりでなく、言語課題でも出来なかったということになり普遍性に関係するように思えるが、普遍性(G)尺度には、変化がみられない。

また言語処理不可能課題のI尺度で、失敗を内的に帰属することが減少している(より外的になっていく)。Seligmanによれば、失敗事態では外的に帰属することの方が適応的であるから、この限りではより適応的に対応しようとしていることになる。普遍性につながりそうな失敗事態では、それを否定しようとして普遍性を変化させず、内的統制を減少させているといえるかもしれない。このことは、数的処理課題では内的帰属が減少することはないことからいえそうである。すなわち、同種の課題で失敗することは普遍性にはつながらないから、内的統制を減少させていないのであろう。この点についてはさらに検討する必要がある。

表7 MS群の前処置1後および前処置2後におけるASQ得点 (N=51)

		前処置1後	前処置2後	t 値
I	M	5.706	5.647	0.206
	SD	1.672	1.594	
S	M	5.706	5.353	1.345
	SD	1.376	1.667	
G	M	4.510	4.353	0.663
	SD	1.954	1.758	
C	M	3.647	3.902	0.939
	SD	1.678	1.729	

次に、前処置1で、ASQの下位尺度I, S, G, のいずれも平均より高得点であったものを高(H)群、いずれも低得点であったものを低(L)群として選択し、各群のテスト課題における平均

と標準偏差ならびに t 検定の結果を示したのが表 8 である。有意な差がみられたのは、L I 群で、高群が低群より有意に高得点であった。それ以外には、有意な差はみられなかった。有意な差はみられなかったが、数値上はどの群も高群の方が低群よりテスト課題での成績が良く、予想に反したものであった。これは、一つには各課題の数が少ないことが挙げられる。リアクタンズ理論では無力感の訓練が少ない場合、むしろ動機づけが高まり、遂行の成績が良くなる (Wortman and Brehm, 1975)。しかし、この考え方によったとしても、何故高群の遂行が高いかの説明はされない。課題数を増やすなどして一層の検討が必要である。

表 8 前処置 1 での ASQ における高群と低群のテスト課題遂行

		N	M	SD	t 値
L I 群	H 群	13	6.007	2.019	2.423*
	L 群	3	2.667	3.055	
L S 群	H 群	18	7.222	2.046	0.420
	L 群	2	6.500	4.950	
M I 群	H 群	11	7.000	2.530	1.008
	L 群	5	5.400	3.781	
M S 群	H 群	14	7.214	2.044	0.191
	L 群	5	7.000	2.450	
計	H 群	56	6.911	2.134	1.493
	L 群	15	5.533	3.399	

* $p < 0.05$.

次に、前処置 2 で同様にして高(H)群と低(L)群のテスト課題における平均と標準偏差ならびに t 検定の結果を示したのが表 9 である。どの条件にも有意な差がみられなかった。主観的な成功感や失敗感についての内省報告を取っていないのでなんとも言えないが、ここでは L I 群と M I 群のみで検討すべきであろう。これらの群では、有意差はないものの同様に低群のほうが高群より、数値上遂行が良い。このことも前処置 1 のところで述べたような検討が必要である。

次に、前処置 1、2 課題およびテスト課題の合計総得点の差を検討するため、前処置 1 の全群の

表 9 前処置 2 での ASQ における高群と低群のテスト課題遂行

		N	M	SD	t 値
L I 群	H 群	14	6.286	1.590	1.440
	L 群	8	4.500	3.295	
L S 群	H 群	17	6.941	2.221	0.240
	L 群	4	7.250	2.754	
M I 群	H 群	11	7.364	2.336	1.141
	L 群	7	5.857	3.288	
M S 群	H 群	15	7.333	2.059	0.195
	L 群	11	7.182	1.779	
計	H 群	57	6.965	2.052	1.362
	L 群	30	6.167	2.842	

正答数および前処置 2 の L I 群と M I 群の正答数を 2 倍した。すなわち、全群とも正答合計得点を 30 点として、4 群間の比較を行った。

表 10 は、そのようにして得られた平均と標準偏差を示したものである。4 群間で分散分析した結果、有意な差のある傾向を示した ($F(3, 183) = 2.408, p < 0.10$)。次に、各群相互の差を検討するために t 検定した結果を示したのが表 11 である。L I 群と L S 群の間に有意な差がみられた。また、L S 群と M S 群の間に有意な差のある傾向がみられた。それ以外に有意差およびその傾向はみられない。

表 10 各群の全解答数

	N	M	SD
L I 群	52	19.866	5.204
L S 群	48	22.604	4.429
M I 群	36	20.917	5.727
M S 群	51	20.882	5.063

表 11 全解答数の群間比較

比較	LI-LS	LI-MI	LI-MS	LS-MI	LS-MS	MI-MS
t 値	**	0.884	0.936	1.504	1.840†	0.531

** $p < 0.01$. † $p < 0.10$.

このことは、筆者の仮定した前処置とテスト課題間への異種の不快刺激（解決不可能課題）の挿入の効果はみられず、むしろ異種の快刺激（解決可能刺激）の挿入の効果が大きいことを示すものである。しかし、ここでは、同種の快刺激への効果がないことの理由は説明されない。

表12は、4群の随伴性の主観的判断について平均と標準偏差を示したものである。分散分析の結果、群間に有意な差がみられた ($F(3,186)=7.416, p<0.001$)。そこで、L I群とL S群、M I群とM S群でt検定を行ったところ、前者でL S群がL I群より有意に高い傾向 ($t=1.761, df=101, p<.10$)が、後者ではM S群がM I群より有意に高い ($t=3.266, df=85, p<.01$) 結果が得られた。また、課題の影響を検討するため、L I群とM I群、L S群とM S群でt検定を行った。その結果、前者に有意差がみられ ($t=3.164, df=89, p<0.05$)、後者にはみられなかった。これらのことは、主観的にも異種の快刺激（解決可能課題）を挿入することが無力感を減少させるのに有効であることを示すものと言える。

表12 各群における随伴性の主観的判断

	N	M	SD
L I群	55	6.273	2.760
L S群	48	7.125	2.204
M I群	36	4.611	2.138
M S群	51	6.360	2.423
計	190	6.196	2.565

要 約

前処置とテスト課題の間に同種または異種の課題を挿入した際のテスト課題の成績および帰属の変化、コントロール感の変化、および随伴性の認識について検討する事を目的とした。実験は、3つのセッションからなっている。第1セッションでは、190名の大学生に前処置として50%しか解答できない数的処理課題を行わせた。その後第2セッションでは、被験者を4群に分け別々の課題を与える。L I群は、10個のアナグラムで

そのうち半分は解答不能である。L S群は、10個の解答可能なアナグラムを与える。M I群は、10個の数的処理課題で、そのうち半分は解答不能である。M S群は、10個の解答可能な数的処理課題であった。その後第3セッションとして、全群に対してテスト課題として解答可能な数的処理課題10問を与える。第1セッションと第2セッション、第2セッションと第3セッションの間に帰属スタイル尺度 (ASQ) を実施し、実験終了後に随伴性の認識について聞いた。

主な結果は、以下の通りである。

- (1) 挿入課題で数的処理を行った群は、アナグラムを行った群より高得点である。とりわけ、解決可能な数的処理課題は、テスト課題での成績が良い。
- (2) 挿入課題で解決可能なアナグラムを行うと課題全体の成績がよくなる。
- (3) 解決不可能なアナグラム課題を与えられると帰属スタイルは、内的統制得点が低くなる。それ以外は大きな変化はない。
- (4) 解決不可能なアナグラムと数的処理課題が与えられるとコントロール感が減少する。
- (5) 随伴性の認識は、解決可能なアナグラム課題が与えられたとき最も強くなる。

これらのことは、学習性無力感解消には、テスト課題と同種の解決可能課題を与えることだけでなく、異種の解決可能な課題を与えることも有効であることを示唆するものである。

引用・参考文献

- 1) Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P. and Teasdale, J. D. Learned Helplessness: Critique and Reformation. *Journal of Abnormal Psychology*, 1978, 87, 1, 49-74
- 2) Abramson, L. Y., Alloy, L. B. and Metalsky, G. I. The Cognitive Diathesis-Stress Theories of Depression: Toward a Adequate Evaluation of the Theories' Validity.
- 3) Alloy, L. B. (Ed) *Cognitive Process in Depression*, The Guilford Press, 1988, 3-30.
- 4) Dweck, C. Motivational process affecting learning. *American Psychologist*, 41, 1040-

1048.

- 5) Goodhart, D.E., The effects of positive and negative thinking on performance in an achievement situation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51(1), 117-124, 1986.
- 6) 青柳肇・高島直子, 学習性無力感に関する研究—その4, 達成場面での肯定的・否定的感情喚起が遂行に及ぼす効果—早稲田大学人間科学研究 1巻1号15-21, 1988.
- 7) 青柳肇・細田一秋, 学習性無力感に関する研究—その9, 解決不可能課題遂行後の快・不快刺激の提示が後続の課題遂行に及ぼす効果—早稲田大学人間科学研究 5巻1号 65-70, 1992.
- 8) Seligman, M.E.P. *Helplessness: On depression, development and death*. W.H. Freeman: San Francisco. 1975.
- 9) Wortman, C.B. and Brehm, J.W., Response to uncontrollable outcome: An integration of reactance theory and the learned helplessness model. In Berkowitz (Ed.) *Advances in experimental social psychology* (Vol.8). New York: Academic Press, 1975.